

2023年1月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

北半球の500hPa 高度をみると、極渦が分裂し、極域で正偏差、中央・東シベリアで負偏差となった。北大西洋～ユーラシア大陸で波列パターンとなり、北大西洋、ロシア西部、東アジアの南部では正偏差となった。200hPa 風速をみると、ユーラシア大陸東部～北太平洋の亜熱帯ジェット気流は、平年の位置と比べて北寄りを流れた。寒帯前線ジェット気流は東シベリア付近で南に蛇行した。海面気圧をみると、北極域で正偏差となり、アリューシャン低気圧はベーリング海付近で平年と比べて強かった。シベリア高気圧の南東への張り出しは平年と比べて弱かった。850hPa 気温をみると、北米北部、ヨーロッパ東部付近で高温偏差、グリーンランド周辺、中央・東シベリアで低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、インド洋赤道域の東部～フィリピンの東海上、南米北部で活発、太平洋赤道域の日付変更線付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、月の後半にインド洋を東進した。対流圏上層では、中国南部付近で明瞭な高気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、インド洋東部～インドネシア付近で南北半球対の低気圧性循環偏差、太平洋熱帯域の日付変更線付近で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、熱帯域では、太平洋中部～南米で正偏差、インドネシア付近で

負偏差となった。南方振動指数は+1.0（速報値）だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.31℃（速報値）で、1891年の統計開始以降、1月として4番目に高い値となった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.80℃/100年（速報値）である。

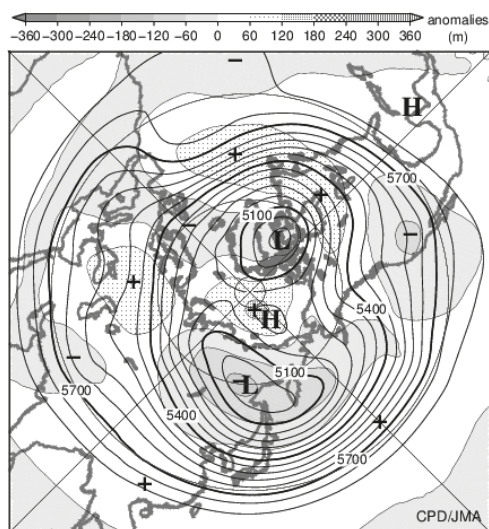
主な異常天候発生地域は次のとおり。

- ヨーロッパ中部～中東北西部、カナダ北西部～中部、カナダ南東部～メキシコ中部、アルゼンチン北部及びその周辺で異常高温、中央シベリア中部～東シベリア南西部、中央アジア南部～南アジア北西部で異常低温となった。
- 中央シベリア南部～西シベリア南東部、サウジアラビア中部、ヨーロッパ北東部～中部、ノルウェー南部～ドイツ北部、米国北部、米国東部、コロンビア北部で異常多雨、ロシア南西部～中東北西部で異常少雨となった。

（気象庁 大気海洋部 気候情報課）

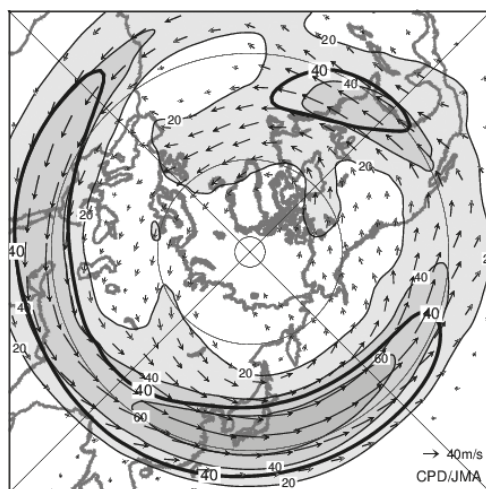
※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



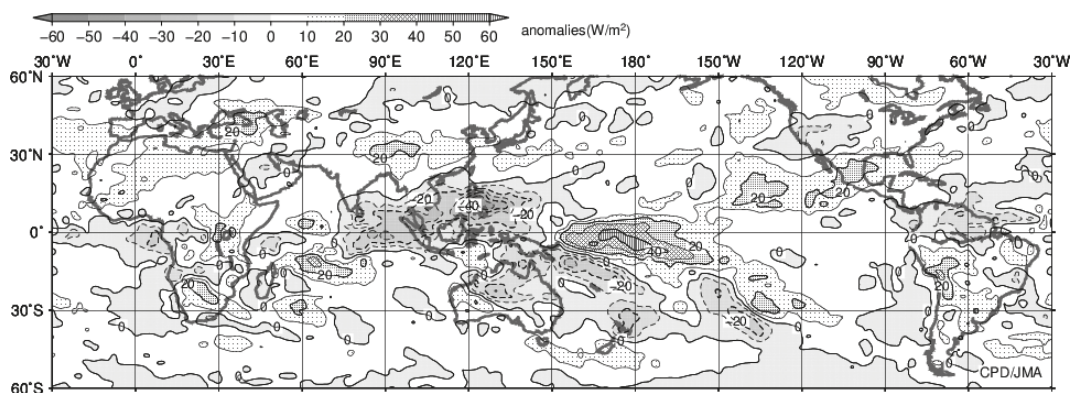
2023年1月の北半球月平均500hPa 高度及び
平年偏差

等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は1991～2020年の平均値。



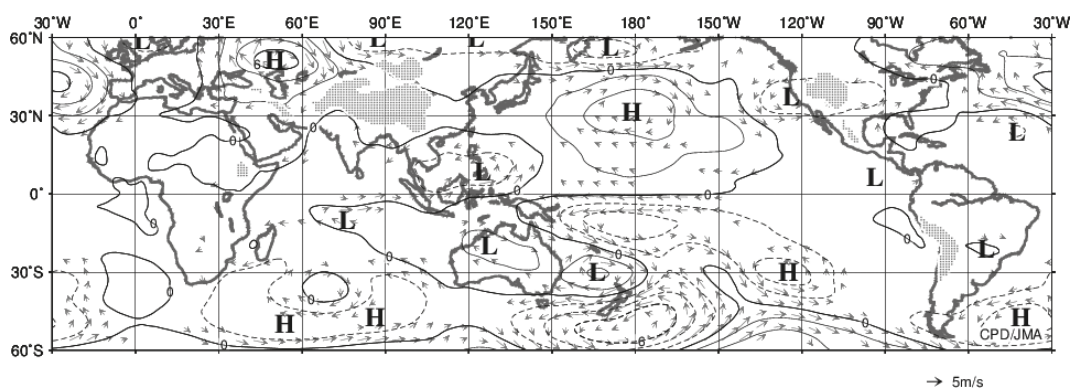
2023年1月の北半球月平均200hPa 風速及び
風ベクトル

等値線間隔は20m/s。太実線は平年の風速で等値線間隔は40m/s。平年値は1991～2020年の平均値。



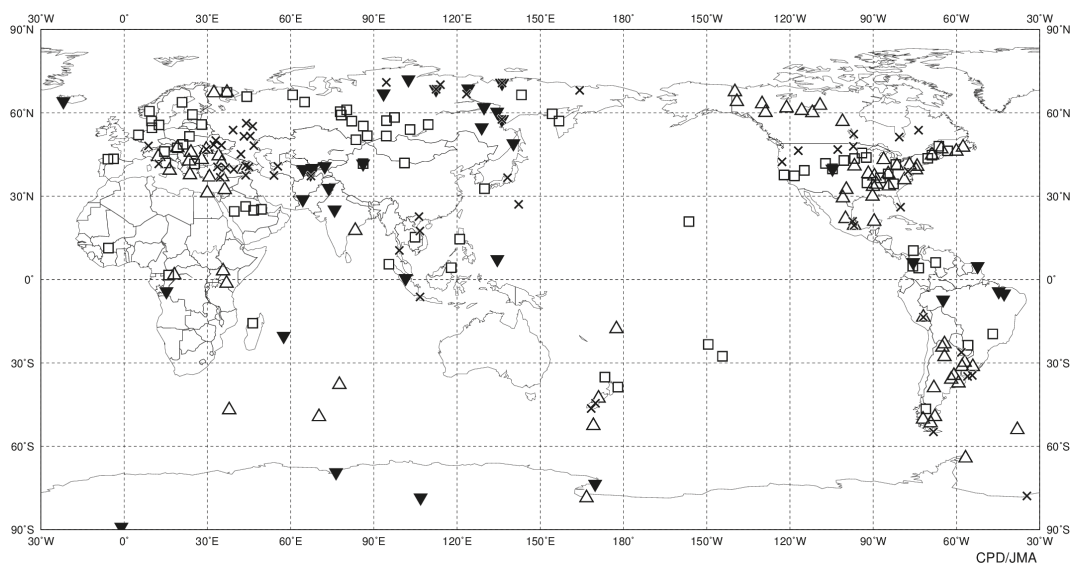
2023年1月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991～2020年の平均値。



2023年1月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991～2020年の平均値。



2023年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨

異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。